

ブルックナー Anton Bruckner(1824-1896) 交響曲第 4 番「ロマンティック」WAB 104
Symphonie Nr. 4 "Die Romantische" WAB 104 (1874) ノヴァーク版第 2 稿 (1874 年版)

1. 動きを持って、速くなり過ぎないように Bewegt, nicht zu schnell
2. 歩くような速さで、ほとんどアレグレットで Andante quasi Allegretto
3. スケルツォ. 動きを持って-トリオ. 速過ぎず. 決して間延びしないように Scherzo.
Bewegt - Trio. Nicht zu schnell. Keinesfalls schlappend
4. フィナーレ 動きを持って、しかし速くなり過ぎないように Bewegt, doch nicht zu schnell

ブルックナーはオーストリアの作曲家であり、オルガン奏者である。彼は未完成に終わった作品を含め、11 曲の交響曲を書いたが、それらの中で、唯一副題の付いている作品がこの交響曲第 4 番「ロマンティック」である。この副題は、ベートーヴェンの「運命」やシューベルトの「未完成」などと違い、作曲者自身によって名付けられたものである。

ブルックナーの存命中、彼は決して現在の様に広く知られた作曲家ではなく、ウィーン以外で演奏された交響曲は、第 4 番と第 7 番だけであった。交響曲第 4 番は、第 2 楽章にロンド形式を採用した点や、第 3 楽章のスケルツォの独創性、音楽の自然への優れた描写性から、広く知られた交響曲となっている。また、タイトルだけではなく、ブルックナーは各楽章にそれぞれ文学的テーマを与えており、この作品はロマン派音楽を代表する、「標題音楽による」交響曲であると言える。この作品では、ホルンの非常に際立った使用法が印象的であり、自然や幻想的な世界への接近する仲介として用いられている。

この作品では、全楽章を通じて、2 拍子、4 拍子の中に 5 つの音で構成される「2+3」のリズムを用いたマテリアルが支配的である。このマテリアルが随所に奏されることによって、作品全体の統一感を得ることに成功している。

第 1 楽章 動きを持って、速くなり過ぎないように Bewegt, nicht zu schnell 2 分の 2 拍子
変ホ長調

第 1 楽章は 3 つの主題を持つソナタ形式の楽章である。ブルックナーはこの第 1 楽章を

構成する要素として「中世の街」、「朝を告げるラッパ」、「森へと走る騎士」等、様々な描写性について言及している。

弦楽器の主調の 1 度の和音による静かなトレモロが奏される中に、ホルンが非常に伸びやかな第 1 主題を呈示する。木管楽器とホルンの呼応により第 1 主題が確保された後、第 2 主題呈示への推移の中に、この作品全体を支配するマテリアルであり、第 3 主題の断片である「2 + 3」のリズムによる旋律が奏される。ブルックナー自身によって「鳥の鳴き声の模倣」であるとされる、変ト長調の第 2 主題は弦楽器によって呈示される。第 2 主題の確保と推移が、セクエンツによって行われ、主調へと転じ、斉奏によって、属調の変ロ長調で第 3 主題が華々しく呈示される。呈示部の終止にはブルックナーの交響曲におけるシンボルとも言えるコラールが挿入される。

展開部は、オーボエとクラリネットが第 1 主題を鏡像形で奏し始まる。展開部では第 1 主題と第 3 主題のみが変奏される。ここでもコラールが挿入され、主調による再現部へ移る。コーダは第 1 主題を主に用い、非常に華々しく楽章を閉じる。

第 2 楽章 歩くような速さで、ほとんどアレグレットで Andante quasi Allegretto 4 分の 4 拍子 ハ短調

作品の主調の変ホ長調の同主短調である、ハ短調を主調に持つロンド形式の第 2 楽章について、ブルックナーは「葬送行進曲」と述べている。楽章は ABABA + コーダ の 6 部分で構成されている。

ヴァイオリンとヴィオラが重い足取りの行進のリズムを刻み、その中でチェロが静かに主題を呈示し楽章は始まる。木管楽器によって主題が確保された後に、弦楽器のコラールによって B 部が始まる。この部分では、調性は頻繁に変わり、また付点リズムのマテリアルが非常に多く用いられていることが大きな特徴であると言えるだろう。主調の属調の同主長調であるヘ長調による A 部に移り、更に主調のハ短調に転調し、冒頭に回帰する。ただしここでは、オーボエによるオブリガート声部が追加されている。続く B 部は短く、ヴィオラが同主長調のヘ長調で奏でるテーマを再現する部分が主となっている。最後の A 部分は主調によってヴァイオリンが奏する新たな 16 分音符のマテリアルを伴って始まる。音楽は高潮して行き、クライマックスに達すると、付点リズムや 16 分音符のマテリアルに加え、三連符、六連符のマテリアルも加わり、様々なリズムの交錯する、ヘ長調のコラールが始まる。音楽が沈静化すると、B 部のマテリアルをもってヘ長調へと向かい、ティンパニの重い足取りの中に、静かに楽章を閉じる。

第 3 楽章 スケルツォ．動きを持って-トリオ．速過ぎず．決して間延びしないように
Scherzo. Bewegt - Trio. Night zu schnell. Keinesfalls schlappend 4 分の 2 拍子 変ロ長調 - 4
分の 3 拍子 変ト長調

第 3 楽章について、ブルックナーは「ウサギ狩りのスケルツォ」であると述べている。楽章の構成は ABABA+トリオによる。この楽章では特に、「2 + 3」のリズムが随所に用いられており、楽譜上の拍子の指示は 4 分の 2 拍子だが、8 分の 6 拍子のリズムが同時に響く箇所が多く、拍子が混在しているような効果をもたらしている。弦楽器による空虚 5 度のトレモロに乗って、ホルンが「2 + 3」のリズムによる狩りのテーマを静かに奏し、そのテーマが繰り返される中で、狩人が近づいてくるかのようにクレッシェンドを続ける。最強奏に達し、A 部を閉じると、同主短調のハ短調で、半音階的な主題を持つ B 部へと移る。短い B 部を閉じると、再び A 部がヘ長調で奏される。ここまでで主題は確保され、幾分展開的な B 部へと移る。最後の A 部では、主題を何度も繰り返し、動物の鳴き声を模倣したかのようなマテリアルも挿入されながら、最強奏へと向かっていく。

小さな三部形式によるトリオは、4 分の 3 拍子の、狩人をたたえる緩やかな踊りの部分である。ダ・カーボで再びスケルツォ部分に戻り、楽章を閉じる。

第 4 楽章 動きを持って、しかし速くなり過ぎないように Bewegt, doch night zu schnell 2 分の 2 拍子 変ホ長調

ブルックナーが「大衆的な祭り」であると称した第 4 楽章は、序奏を伴う、3 つの主題を持つソナタ形式による、長大な楽章である。この楽章においても、「2 + 3」のリズムは多用され、ここでも 2 分の 2 拍子と 4 分の 6 拍子の混在が感じられる。変ロ長調の序奏部は、主調である変ホ長調の呈示部へのドミナントの役割を持っている。また、序奏部の中では、第 1 楽章および第 3 楽章のマテリアルが用いられ、呈示部への緊張感を高めて行く。

第 1 主題は、斉奏で、非常に厳粛な雰囲気の中で呈示される。ハ短調で、4 分の 4 拍子による第 2 主題が呈示されると、対位的に展開し、目まぐるしく転調する。第 3 主題は 2 分の 2 拍子に戻り、打って変わってにぎやかな雰囲気の中に呈示される。推移部では、音楽は沈静化し、これまでの楽章のマテリアルを基にした展開部が始まる。この展開部は、見事な出来で、曲の様々なエピソードを回想しながら、再現部へと移行していく。再現部では、序奏部で用いられた第 1 楽章の第 1 主題のマテリアルが、鏡像型で用いられ、それをもって始

まる第1主題の再現部は、呈示部よりも拡大され、コラール風の非常に豪華なオーケストレーションによって奏される。展開部では、第2主題から第3主題への推移は、突然の最強奏によるものであったが、再現部では、クレッシェンドによって移り変わっている。比較的短い第3主題再現部を経て、コーダへと移る。コーダでは、第1楽章の第1主題が、本来の形と鏡像型の両方の形で同時に奏され、そのモチーフを長大なコラールへと展開し、非常に華々しく曲を閉じる。

©Kaoru Shirai, 2017.